
袋小路の奥に

新品の靴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

袋小路の奥に

【Nコード】

N3335P

【作者名】

新品の靴

【あらすじ】

ある少年のおはなし。

こつん。

目の前の石を蹴る。

見上げればどんよりとした雲が空を覆い、こつちの気分までふさがってしまう。

マンションから追い出された僕は、ただ行くあてもないままぶらついていた。

ただちよつとだけ片付けをし忘れてただけなんだ・・・。

いや、し忘れてたんじゃなくて、後でしようと思つてたんだ。なのに疲れてるからつて母さんは僕にやつあたりするんだ。

「あーあ。晩御飯まで帰れないなあ。」

僕のマンションは町を見下ろせる丘の上にあつたから、迷うことはないと思つてた。

なのに坂を下りながら路地を右へ左へと当てもなくさまよつていると、全然見覚えのない場所まで来てしまった。目印となるマンションも見当たらない。人もいない。周りの塀がやけに高く感じる。

うつすらとこみあげてくる感情を抑えながら、来た道を戻ろうと努力する。

だんだんと暗くなつて。

雨もぽつぽつと降り出して。

もはや歩いてはいられなかった。

マンションを出たことがはるか昔に感じられた。

あの暖かい家に帰れるならなんだってします。

僕は神様に何度も頼んだ。

「くそつ。行き止まりか・・・。」

押し迫るような袋小路にぶち当たるたびに不安が膨れ上がる。

「また、ここもか・・・」

戻ろうとしたら。

「とおりぬけ、できます。」

左奥の壁の隅っこに、そんな看板がかかっていた。

やっぱり迷う人もいるんだ。そりやそうだよな。いままでにこのあたりで迷ったのは僕だけじゃないはず。そこからたぶん大きな道に続いてるんだろう。

だがしかし、看板の側に来ても左右は壁。道なんて続いてなかった。

「なんだよこれ・・・。いい加減にしろよ・・・。」

確かに僕の読みは外れていなかった。確かに、この辺で迷う人はいら。でもそれを逆手にとって、その希望を踏みにじろうという魂胆か。

「こんな看板・・・。」

つま先で軽く蹴ると、コンという浅い音がした。

「ん？」

こんどはその壁をノックしてみる。

コンコン

なんだこれ。コンクリートの壁に見せかけたハリボテ？

こんどは思いつき強く蹴る。不安を足の一点に溜めて。

「こ、の、や、ろっ」

ガンという音がして、ちょっと焦った僕は早足でその場から逃げだす。

はずだったのだが。

みごとにコンクリートにカモフラージュされた扉が開き、その奥には地面がぱつくりと割れて階段が見えないところまで続いていた。なんだこれ。誰かの家の倉庫？

地下へ続く階段から、ぶわっと熱風が吹きつけた。

「いいにおい・・・。」

どこか異国を思わせるような、いろんなにおいが混ざったにおいが全身を包む。

好奇心。

不安。

「そんなもん・・・。」

行くにきまつてる。

僕の声が残響となって響く。

遙か下に、黄金がとろけたような光が見える。

その光が大きくなるにつれて、喧騒の音がどんどん大きくなる。よく耳を澄ませても、明らかに日本語ではない。

「インド語みたいだな・・・。」

不安を潰すためにそう呟いてみたけれど、今は何の役にも立たない。ふつと母さんのことを思い出す。

もしかして今とても危険なところにいるんじゃないだろうか。

もう永遠に戻ってこれないんじゃないんだろうか。

じわりと涙が目を濡らす。

だけど帰れなかった。何があるのか、知りたかった。

・・・

こつん、こつん。

そうして最後の一段を降りきって、恐る恐る扉をあける。

「うわっ」

眩しくてぎゅっと目をつぶる。無防備になった自分に本能が警鐘を鳴らす。

だめだ。目をあけるんだ。よく見る。

そこは大きな、大きな商店街のようだった。そう、あの中国とかインドにありそうなごたごたした感じの。いろんなお店。いろんな人。いろんなにおい。いろんな音。父さんがよく言う、活気あふれる、とはこういうことなのか・・・。

うずうずしてきた。

うずうずしてきた！

別世界！

まるで物語のようだ。

僕はためらわずその世界へと足を踏み入れた。

・・・

ぐうとおながが鳴るのがわかる。そりやそうだ。マンションを出てからずっと歩きっぱなし走りっぱなし。おいしそうなお肉、見たこともない野菜、芳醇な香りを漂わせる果実。所狭しと並べられているのに、手が出せないのはなんともじれったい。

「入ったはいいけど、どうしよう・・・。」

もどる、べきか。

このままもしかしたらこの世界にのまれてしまうのかもしれない。と、とりあえずさっきの場所をちゃんと確認しておこう。

・・・

「ん？」

僕は後ろへ向いた。うん。そこまではよかった。なのに、・・・

「ど、どうして？あ、し、が、」

懸命に足を前へ出そうとしても、足自体がとても重くなって、進むことができない。

汗が噴き出す。

待て。落ち着け。

横は？

すると今までのことがなかったかのようにすんなりと足は動いた。また戻ろうとすると、動かない。

「ということは、自分の進んだところからは、もう戻れない・・・」
大変なことになった。戻れない・・・。

でもそんなこと考えてるヒマなんてなかった。
はじめて。

やっと。

本で読んだことしかない「魔法」に、初めて触れることができたからだ。

僕は何度も何度も戻ろうとして、そのたびに重くなる足を不思議な目でみつめた。

とりあえず、と、灯火の柱の側に腰を下ろす。

幸いなことに人が多すぎるせいで誰も僕に関心なんて向けない。
とりあえず、僕に残された選択肢は2つ。

このまま残るか。

先へ進むか。

でも先ってどっちへ？この入り組んだ商店街の中僕はどの道を選択すれば元に戻るのだろうか？
ぐう。

またおながが鳴る。

誰かに話しかけようか・・・。

しかしそばを通る人々は皆忙しそうで、もし怒られたりしたらどうしようかとも思っ、なにもできないでいた。

「どうしよう・・・。」

正直僕は期待していた。

誰かが助けてくれるのを。手を差し伸べてくれるのを。どうしたのって。物語ならそうだ。でも現実はそうはいかない。

「よいしょ・・・っと」

重たい腰をゆつくりと上げる。仕方がない。誰かに聞こう。どうすればいいのか。

先を急ぎすぎでは取り返しのつかないことになりかねないけれど通りの人の流れがはやくってはやくって、気がつけばかなりの距離を流されていた。はやくしないと・・・。焦りだけが先行する。

よし・・・。あの店の人なら聞きやすそうだ・・・。

肌の焼けた若いお兄さんが立つ店は、その若さとは反対にとっても古ぼけていた。

思い切って店の前に立つ。

「あ、あの。すいません！」

この世界の住民との初めての会話。

「ん？何か用？」

わかる・・・。

理解できる。

耳に入ってくる音としての言語はさっぱり何語かもわからなかったけれど、どうしてか頭では何を言っているのかがわかる。これも魔法・・・。

初めての会話の成立に達成感を噛みしめっていると、店の人は不思議そうな顔でこちらを見る。

「何か買うの？」

ずらりとならべられた食品、文房具、服、アクセサリーを買うお金なんて僕にはない。

「いえ、その、あのー・・・お金ないので・・・。」

そんなことを言いに来たのではなかった。

何から聞けばいいかわからなかった。

「君、もしかして、初めての人？」

「え？あ、ハイ・・・。」

「へえー・・・。めずらしいね。最近じゃあんまりこないんだけどね。ということは、君はすぐにもう出て行くんだね。」

どういう意味だろうか。そんなに簡単に出来るのか。

「あの、それって、僕のいた世界にすぐ戻れるってことでしょうか？」

聞きながら思わずにやついてしまう。魔法の力で自分の知らない言語を自分が話している！それがなんとも奇妙でこそばかった。

「そうか。君はまだ何も知らないんだね。てことは、君にとって僕が初めての人かな？」

「はい……。正直誰に話しかければいいか分からなくて……。」「ハハハと朗らかに笑う。こんなかつこいいお兄さんになりたいなと思った。

「そりやそうだよな。ううんとね、この場所には2種類の人が出て、ひとつは僕らみたいな、この世界に住んでる人。まあ縛られてるって言ってもいいけど。もうひとつは、君みたいに別の世界からここへ来る人。正直その人たちがどこから来るのかはみんなさっぱりわからない。でも一つ、確実に言えることがある。君たちは、帰れる。絶対に。」

しっかりとそう言う彼を見て僕は思わず。

「不安だっただろう。みんな最初はそうなる。君よりもっと大きい人だって安心して泣くもんだ。だからもう大丈夫。君たちにとつて、この商店街には、終わりがあらしいんだ。もちろん僕たちは行けないけど。この商店街をずっと歩いていると、突然終わりが来るらしい。とにかく今まで来た人はみんなそうやって突然来て突然帰っていく。ほんの少しの時間だけここにいるんだ。どうしてもよくわからないけれど。」

突然来て、突然帰る。ほんの少しの時間だけ、ここにすることができ。

この世界は安全で、そしてとても儚いものなのか。

まるで夢のように。

そうか。夢なのか。魔法なんて現実にあるはずがない。ここは夢の世界か……。

「ねーここにはめる装飾品なんだけどさー、ってあれ？この子誰？」
見上げると美人のお姉さんが立ってる。ただ背中から木が生えてる
んですけど。

「さっきこの世界に来た子。いまこの世界の理を教えてたの。装飾
品なら、確かあの棚に・・・」

「へえーこんな子供でも来るんだー。私、ミヨ。短い間だけど、よ
ろしく。」

緑色の澄んだ瞳で僕を見る。うん、いい人だ。

「僕、リュウタです。よろしく願います。」

「リュウタって言うんだー。いい名前だね。この世界のこと、ちょ
つとはわかった？」

「まあ・・・肝心なところは。」

「まーすぐに帰っちゃうだろうけど、ゆっくりしていつてね。」
ここって。

あつたかい。

「はいこれ。はめてみて。」

色とりどりの宝石がちりばめられた装飾品はすんなりと元の鞘には
まった。

「びったし。ありがと。」

「どういたしまし、て。今度メシおごってね。」

「やっぱりー。ほんとアンタ面倒くさいよね。」

仲いいんだなあ・・・。

「今からどうする？この際だしここでご飯でも食べていきなよ。お
代はこの太っ腹なお兄さんが払ってくれるらしいし。」

「え？いやお金ないって！そもそもこの店が儲かっていると思う・・・」

「じゃーこっちこっち。すっごくおいしい店があるから。たらふく
食べて帰りなさい。」

「人の話を聞けって・・・。」

その店は右に左に曲がった狭い路地にひっそりとしかしどっしりと

構えていた。

店に入ると、1階はどうみても書斎の様子を呈していた。入ってすぐ奥に書斎机が存在感をひたすら示しており、それを囲む幾千もの本が知の空間を創っていた。

「え……。ここって本当に店なんですか？」

「2階にあるの。変わってるでしょー？まあそのせいでお客さんは全然こないんだけどね。でも味は保証できるから大丈夫。」

そう言いながら本の山をかき分けながら部屋の奥にあった細い階段へ向かう。

「店長はちよつと変わった人だけど、でもいい人だから。」

2階へ上がってみると、これまた狭い部屋だった。いや、狭いんじゃない。厨房が場所をとりすぎているのだ。部屋の3分の2を占める巨大な厨房に、髪を結んだいかつい男が一人腕を組んで立っていた。

「いらつしゃ……。」

「いつもの3つ。お代はスフーが払うつて。」

「……。あい。」

せつかくの店長の最初の一声はミヨの声にかき消されてしまった。

哀れ店長……。

「ほんとお金ないんだって……。」

なるほど、このお兄さんの名前はスフーというのか。

ミヨとスフー。

覚えた。

「ん？このボウスは」

「リョウタくん。さっきこの世界にきたばかりなの。」

「ほう。よろし……」

「リョウタくん。彼が店長。……ね？変わってるでしょ？話すのがとっても遅いの。」

いえ、それはあなたが速いだけなんじゃ……。

「でも大丈夫！料理作るのだけは速いから！」

声のボリュームを落として言ってるつもりだけどまる聞こえだと思う……。

店長の額にしわが生まれ始めてる……。

「よ、よろしく願います。」

「お前は何の為にこれから生きていく。」

「え？」

「店長は哲学が好きなんだよ。だから初めての来客者にはこうして問題を与えるんだ。」

スフーがそつと囁いてそう言ってくれるが、なんの助けにもならない。やっぱりミヨが言うように変な人だ……。

「どこの世界に生きていようが関係ない。お前は、これから何をして何の為に生きていくのか。」

「わ、わかりません。未来は読めません。」

「違う。未来の話について言っているのではない。お前の意思を聞いているのだ。」

店長の眼光は鋭い。

僕は。

僕はこれから何の為に生きていくんだろうか。

心の中の現実の扉がゆっくりと開いてゆく。

学校へ行き。

勉強をして。

毎日が毎日として経っていき、

気づけばスーツを着た個を失った人間みたいな何か。

主体性を持たず、ただ流されて生きるだけの予測できる人生。

楽しみも悲しみもあらゆる感情は許容範囲内に収まり、

法則を打ち破るほどの情熱もエネルギーも持ち得ずに一生を終える。

答えは明快だ。

そんな世界に戻りたくないなら、ずっとこの世界に居ればいい。
戻ることができないなら。
進まなかったらいい。
魔法があるじゃないか。
僕の大好きな魔法が。

「僕は、戻りたくないです。」

スフーがはっと息をのんだのが分かった。

「答えになってないぞ。」

「わかってます。でもあんな世界に帰るなら、こっちの世界にいた
ほうがまだ生きる目的が見つかりそうです。」

「お前は本当にそう思うのか。」

「はい。ここには活気があるし、みんないい人だし、魔法だってあ
るし。」

「・・・いるよ。そういう人。」

そう呟いたのはミヨだった。

「え？」

「ここにときどき別の世界から人が来るのは聞いたよね？たまにね、
そういう人たちの中で、帰りたくないって言う人がいるの。君が今
言ったようにこの世界は自分の世界よりもいいからって。もちろん
私たちは強制的に送り還すこともできないし、事実なんの迷惑もか
かってないからね。」

「じゃあ・・・」

「最初は」

「最初はいいの。この世界を楽しんでるし、進みさえしなかったら

ずっと居れるからね。中には店を構える人もいたわ。でもね、だんだんと、気になってくるの。元の自分のいた世界が。日を追うごとに商店街の先を見つめるようになり、だんだんとこの世界で生きる活力を失ってしまうの。以前は笑顔で私たちと接してくれていたのに、最後にはちゃんとした会話すらできなかった。」「

「どうして、そんなことに・・・？」

「現実があるからよ。自分の還る世界がある限り、自分の存在というものは落ち着いていられないの。例え還る場所がどんなに辛いところでもね。」「

「だから、店長は聞いたんだよ。君が逃避の目的のためにこの世界に居続けるんじゃないかと危惧してね。」「

「柔らかな視線でスフーはそう言ってくれる。」「

「私の質問に答えるのは今すぐじゃなくていい。だが必ず、自分の世界に戻っても、答えを見つけるんだ。」「

そう言って店長は厨房の奥へと消えていった。

「まあ、ここに来た人は誰でも思うものだから。店長も怒って言うてるわけじゃないし。」「

「うん。ありがとうスフーさん。」「

「あの、さっきの人の話なんですけど、その人って結局どうなったんですか？」「

「フンと鼻を鳴らしてからミヨが言った。」「

「私たちが勧めたら、嬉々として現実に帰って行ったよ。傷つくのはこっち。」「

「ミヨ。言いすぎ。・・・その人、結構ここに居たし、ミヨとは仲が良かったから、最後はよけいに辛くなっちゃってね。ミヨも相当精神的にきてたんだ。」「

窓の方を向くミヨは何を思っているんだろうか。
確かに、そうかもしれない。ミヨやスフーにとっては、この世界

が現実。そこへ僕らがやってきて、現実が嫌だからここに居たいと言っ。なのに最後は、現実に戻りたいからここには居たくないと言っ。

それに振り回されるこの世界の住民たち。

なんて、僕らは身勝手なんだろう。

この人たちは自分の世界で懸命に頑張っているというのに。

「ミヨさん。」

そう言っ僕はポケットからあるものを取り出す。

そして僕は、はじめての魔法をつかう。

「これは、僕ん家の鍵です。ミヨさんにあげます。」

「え？でも」

「もしミヨさん達が仮にも僕の世界に来れた時は、ぜひ僕ん家に来てくください。よくわからないけど、その鍵がミヨさん達と僕とを繋げてくれる気がするんです。それとも一つ、その鍵には意味があります。」

「もし今度、僕みたいな他の世界の人 came ときは、その鍵を見せてくください。そうすれば、その鍵を見る度に、その人にとっての現実の扉が開きます。だから、ミヨさんもその人もこれ以上苦しむことはなくなります。」

「え・・・？どういう・・・？」

「ほう、ボウズ、もう魔法が使えるようになったのか。」

おいしそうな料理をこちらに運びながら店長が言っ。

ミヨが言っように料理作るのは格段に早いんだ・・・。

「どうやったのかは、僕も分からないんですが。でもたぶん、これが最初で最後の気がします。」

「そっか・・・。ありがと。いや・・・ありがと。大切にする。」

「こっちばかり貰ってちゃんだから、僕たちも何かあげようよ。」

「えーいいですよそんナー。この料理のお返しですよー。」

おいしい料理をほおばりながらあれやこれやと話していると、

「あ、これ丁度いいんじゃない？」

それは、鏡にカケラのようなものだった。

「あれ？でもこれ、反射してない・・・」

「そう、これは光を反射するんじゃなくて、光を吸収するの。本当の暗闇になったときに、その溜めた光を発散するらしいの。あいにくこの世界はいつも光に満ちてるから言い伝えただけだね。しかもクアンネの沼の10杯分も溜まるんだから！」

「クアンネの沼？」

「そう、この地下世界最大の沼。世界最大って言ってもこの世界自体あんまり大きくはないんだけどね。」

「地下に沼が・・・すごい。」

「ここから近いからあとで寄ってみようか？」

「うん！行ってみたい。」

そうして僕は鍵と引き換えに、鏡のカケラを貰った。首に下げたカケラは頼りなさに揺れていた。よろしく。僕が新しい主人だよ。

最後のデザートに取り掛かろうとした時、外から大きな砲撃音がした。

1発、2発、3発・・・

爆音のエネルギーで窓が揺れ地面が震える。

「あ、あの・・・どうなっただんですか？」

振り向くスフとミヨは驚きを顔に表していた。

「始まった・・・」

「始まった・・・？もしかして何か暴動とか起こったんですか？」
ただならぬ気配に身構える。

「いや、いや、違う違う。誤解させちゃって悪いね。この砲撃の合図は、滅多に見られない一大カーニバルの始まりの合図なんだ!」
興奮気味にそう語るスフーを見て、そのカーニバルとは相当凄いものなんだと察しがついた。

「ほら、リユウタ! あんた運いいよ! 早く行こう!」

「店長、ごちそうさま!」

「あの、店長、いろいろと、ありがとうございました。」

「店長、今回もお金はまたいつか・・・」

急いで階段を下り、通りに出てみる。

さつきと比べて刻々と人の数が増えている。急がないとこの人の増え方ではすぐに行き詰まるだろう。

「はやく!」

スフーが先頭に立って人ごみをかき分け、ミヨに手を引つ張られながらどんどんと進んでいく。

聞いたことのない音楽がだんだんと聞こえてくる。

「やっぱりあのカーニバルだ。あの音楽はもうちょっとで始まる合図だ!」

ますます走るスピードを速める。

スフーさん、頼もしいなあ。

ミヨさんの手、あったかいなあ。

だんだんと音が大きくなっていく。

もうちょっとだ。

熱気がすごい・・・。

急に視界が開ける。

「ほら! あれ見・・・」

・・・あんまり時間が経っていないのは直感で分かった。
おそらく僕がああ階段を下り始めてから数分しか経っていないだろう。

僕が目にしたのは一大カーニバルではなく、見慣れたいつもの大通りだった。

雨に塗られながら、僕はしばらくただ茫然と立っていた。

こんなにもあっけなく終わるものなのか。

期待と虚しさを込めて振り返っても壁しかない。

そういえば、あっちの世界の空気はこもってた・・・

突然な現実には頭がついてゆけない。

こんなにもあっけなく終わるものなのか。

僕はどうしたらいいんだろう・・・

あの世界はなんだったんだろう・・・

僕の心を虚しさが支配していた。

楽しい想像からふと現実に戻って今の楽しい気持ちは想像から来てたんだと思った時みたいな虚しさだった。

動く気にすらなれない。

僕はだんだんと焦り始めた。

自分自身の脳があの世界を否定し始めていた。

これが現実の強さというものか。

あれだけの刺激を受けたというのに、現実に戻結したただけでもう疑い始めてる。

・・・？

現実がほかのどの世界よりも強いと言ったのは誰だっけ？

それこそが、向こうの世界へ行ったことの証明じゃないか。

ミヨとスフー、そして店長の出会いが、僕の考えを変え、そしてそれは世界を隔ててもちゃんと受け継がれてる。

現実にはちゃんと向き合おうとする度に僕はあの世界を思い出すだろう。

だから僕は絶対に忘れない。

お家に、帰ろう。

そして母さんに、謝ろう。

もっと、いろんなことを考えよう。

「ただいま。」

「リュウタ！あんなこんなに濡れて・・・」

「母さん、ごめんなさい。」

「・・・もういいから、風邪引くから熱いシャワー浴びてきなさい。」

「うん。」

「あら・・・？あんた変わった匂いしてない？」

「ああ・・・途中で、雨宿りのついでに変わった店に入ってたからだと思うよ。」

「へえー・・・なかなか楽しんでんじゃない。」

皮肉っぽくそう言う。

帰れてよかった。

いそいそと浴室へ向かい服を脱ぐ。

「あ・・・」

そういえば、もうひとつ証拠があつたな・・・。

反射しない鏡のカケラ。

「不思議だなあ・・・こっちに戻ってきたらちゃんと鏡になってるじゃないか。」

ああそういうことが。吸収できる光は向こうの世界だけ。こっちの光はやっぱり違うのかな。

シャワーを浴び服を着て一息つく。

遠くの方ではもう雲が切れかかっていて隙間から夕日が差し込んでくる。

眩しさに目を細めながら、僕はニタリと笑う。

頑張って、生きるか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3335p/>

袋小路の奥に

2010年12月6日04時29分発行